

モード Mode は語る

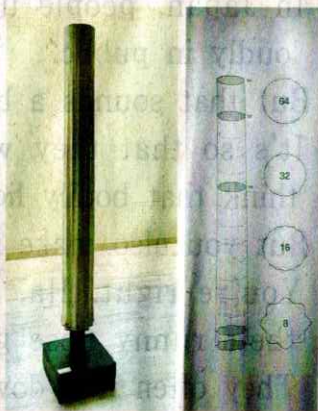
中野 香織

ガウディにみるSDGsの心

駐日スペイン大使館で「SDGsの先駆者 アントニ・ガウディ 形と色」という展示がおこなわれている。建築のパーツの模型を通して、ガウディの意図や細部の技法を学ぶことができる。

1882年着工の未完の大聖堂サグラダ・ファミリアは、SDGs（持続可能な開発目標）ということばがなかった時代から未来を見据えていた。140年前に既に人々が環境と共存しながら幸福に暮らすための建築に取り組んでいたのだ。

最も強く印象に残ったのは、職人への配慮だ。サグラダ・ファミリアの表層だけ見ると、平たんな線や面ではできてお



柱は下から八角形で始まり、上部で円に変形する

らず、複雑極まりない模様が彫刻されているように見える。職人泣かせだと思っていたが、逆だった。自然を模したように見える細部は、精密に幾何学的に設計されており、職人は単純な直線を切り出してさえいけば、美しい結果を生み出すことができるようになっていた。

たとえば自然の樹木のように見える柱は、一番下が八角形で、上にいくにつれ十六角形、三十二角形、六十四角形になり、ついには正円となる。柱を斜めにしても上から伝わる荷重が下に流れていくような表現となり、樹のように見える。どんな職人も仕事をしやすいようにとい

うガウディの思いやりあるデザインに、全ての人を尊重するSDGsにつながる精神を見る思いがする。

「トレンカディス」という技法も興味深い。陶器やガラスなどの破片をモザイク状に敷き詰めて面を仕上げる。細部がカラフルになり、光の効果でより立体的に見える。素材は破棄された花瓶やお皿だという。ものを廃棄しないで素材としていかすその精神も現代に響く。

未来の世代へ受け継ぐべき技とメッセージを建築に込めたガウディは、「神は急いでおられない。焦らなくていい」と語った。未来を見据え、作る人に思いを寄せ、ものの命をいかすことで新たな美を創り出す姿勢は、サステナビリティを連呼するモード界にとっても、インスピレーションの宝庫となるだろう。

設計の根本に思いやり